



『 子宮頸がん検診について 』

子宮頸がんは、ヒトパピローマウイルス（HPV）に感染することにより発生するがんで、近年20～30歳代の若年層で多く発生しています。HPVは性行為で感染し、多くの場合は数ヶ月で感染は無くなります。感染が継続した場合にがんの前段階である異形成（いけいせい）を経てがんとなります。

子宮頸がん検診は、子宮頸部の表面から綿棒などでこすり取った細胞を顕微鏡で調べる「細胞診」で行われ、異形成からがんまで全ての段階を発見出来ます。妊娠中でも細胞診は行うことが出来るため、妊娠時の検診で異形成またはがんと診断されることもあります。異形成または早期がんまでに発見出来れば、子宮円錐（えんすい）切除という子宮の入り口のみを切除するだけですみ、その後も妊娠・出産は出来ます。

欧米では、子宮頸がん検診の受診率が80%以上であるのに対して、日本では35%程度であるのが現状です。若年層の受診率が低いことが、若年層のがん発生率が高い原因と言われています。

早期発見が非常に重要ですので、20歳代からの検診をおすすめします。



鹿児島厚生連病院
病理診断科部長
松木田 純 香